市民参加の地域福祉に　社会福祉大会

これからの地域福祉には、市民の協力が必要になってきています。

九月二十六日、産業厚生会館に関係者や市民約百八十人が集まり、白根市社会福祉大会が開かれました。

これは、市民参加による地域福祉を進めようと、市社会福祉協議会が毎年開いているもので、福祉活動に尽くされた人の表彰や、中学生と若者五人から私の主張・体験発表があり、記念講演も行われました。最後に「活力ある福祉社会の実現を目指して、よりいっそうの努力を重ねる」との大会宣言を満場一致で採択しました。

いちょう並木の手入れ　白根ライオンズクラブ

白根ライオンズクラブ（鈴木剛会長・会員三十二人）が、十月八日、白根第一中学校前のいちょう並木の手入れと植え替えを行いました。

最近、この並木に病害虫の被害や立ち枯れが目立つことから、同クラブが新しい苗木を贈り、今回の作業となったものです。

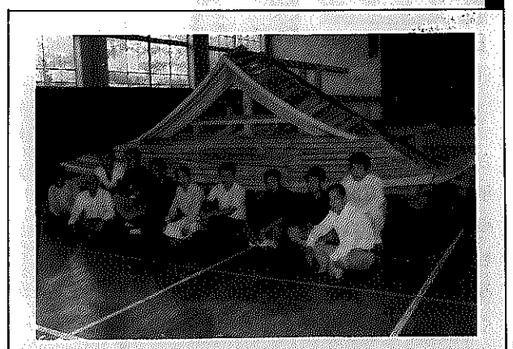
植え替えた木の中には幹から折れていたものもあり、作業を行った十数人の会員は「今度こそスクスク育て」と、新たに植えた十一本の木に願いを込めていました。また、野球のスコアボードも贈り、この日グラウンドに取り付けました。

体育館の中に屋根？　大工さんの実技講習会

市建築職別組合連合会（笠井宗作会長・会員二百二十人）では、九月二十六日から二十八日の三日間、青年教育センターで、木造建築実技講習会を行いました。

これは、若手の大工さんの技術を高めようと毎年行っているもので、五十九年からは、実物大の屋根を作りながら実習しています。

各地区九支部から参加した二、三十代の大工さん十三人は、一日目の製図に始まり、最終日には入り母屋造りの玄関の屋根を、体育館の中に組み上げました。



自分自身を見つめる自分史　作り方教室

最近、本を個人で出版する人が増えています。自分史もその一つです。

市立図書館では十月四日、中央公民館で「自分史作り方教室」を開きました。講師には現在、新潟空港の歴史を手がけ、自分史を書きたいという人の相談にも応じている新潟市の長谷川甲子郎さんを招き、参加した市民二十五人は熱心に話を聞き、ビデオを見ながら学習。いろいろ質問したり、すでに出版された自分史を手に取って見たりしていました。

「自分が生きた時代の学習に、図書館の資料を大いに活用していただきたい」と同館では話しています。

ビデオで学習する受講生。左はじは講師の長谷川さん

マラソンと自転車訓練に　茨曽根小に舗装コース

茨曽根小学校（浜田裕子校長・児童百九十二人）に、このほど〝チャレンジコース〟が完成し、九月二十七日に走り初めが行われました。

このコースは、雨上がりでも児童がすぐに走れるよう、また、自転車の安全運転指導にも役立てようと、学校と父兄、地域の人たちが協力し合って舗装や交通安全設備を整えた手づくりコースです。放課後、ペンキでラインを引く先生の姿を見て、児童たちもとんできてしっかり手伝っていました。

「ここの父兄は従来から、子供と学校のためならばと、協力を惜しみません」と学校では感謝しています。

校舎を一周する幅二㍍、長さ三百三十六㍍コース。アスファルト舗装で、センターラインや路側帯、横断歩道がペンキで描かれ交通標識も三十本設置

ノロ川にコイを放流　信濃川漁協白根支部

十月十四日、信濃川漁協白根支部（高井一衛支部長・会員三十七人）では、中ノ口川にコイを放流しました。これは、年々河岸が整備されて産卵や住む場所の少なくなっているコイを増やそうと、昭和四十六年から毎年秋に行っているものです。

当日は、村松の養漁場から運ばれた体長十五㌢余りのコイ約七百匹を、戸頭の頭首工下流から放しました。

「私たちが漁をしていても、そう増えている感じはしないんですが、釣り人はどんどん釣れて困ると言います。養殖のエサで育ったので、釣りエサによく食いつくのでは」と、高井支部長は話していました。

思いやる心　地域社会とボランティア

人生にふれあえる旅

「旅の道連れには、障害者を選ぶ」ことを、私は勧めます。

思い出すのは、何年か前、障害を持つ青年たちとヨーロッパへ旅をしたことです。そのとき初めて知り合った人たちとは、今でも兄弟のようなお付き合いをしています。西ドイツで通訳に立ち合ってくれた人が「今までこんなすてきなグループと接したことはない」と、涙を流して別れを惜しんでくれました。

毎年夏休みに行っている「母と子のふれあいの旅」は、今年で五回目になりました。一行二百人が「愛と平和の国づくり」を目指して、四泊五日の旅に出かけます。

障害者と旅を

ミニコミュニティが移動したようなもので、老若男女を含み、その中に三十人の障害児(者)が参加しています。

この夏は、白石蔵王に行きました。関東一円から集まった人たちが、お互いにさまざまな人生とふれあって、今回もまた実りの多い旅でした。

百五十人の子供たちは、楽しさとともに、思いやる心を学んでくれました。

いじめられっ子で、転校を繰り返す子が、今年も参加しました。「この旅で出会う障害児のことを考えると、この一年間は、どんなにいじめられても辛抱できる」と言うのです。そして今回も障害児の介助をいっぱいして帰りました。

めぐみちゃんの展覧会

あるグループの部屋を訪ねました。壁に絵がたくさんはり出されていました。「めぐみちゃんの絵の展覧会をしているのよ」とみんなが言うのです。めぐみちゃんは重い知恵遅れの子供で、ものが言えませんが、絵だけは上手に描けるのです。このことを発見し、思いやりの心を発揮した彼らは、なんとすばらしい子供たちでしょう。

このほか、枚挙にいとまがないほど、この「ふれあいの旅」にはうれしいエピソードがたくさんありました。

「障害児(者)と旅を！」皆さんにぜひお勧めしたいものです。

淑徳短期大学教授。前全国ボランティア活動振興センター所長
木谷宜弘